

|      |                                                                      |
|------|----------------------------------------------------------------------|
| タイトル | ウクライナ語正書法史：19世紀以降のウクライナ語正書法の変遷を中心にして                                 |
| 著者   | ポズドゥニャコーヴァ, L.Ye, ； 寺田, 吉孝;<br>ПОЗДНЯКОВА, Л.Є.; ТЕРАДА,<br>Йосітака |
| 引用   | 北海学園大学学園論集(149): 127-141                                             |
| 発行日  | 2011-09-25                                                           |

# ウクライナ語正書法史

—— 19 世紀以降のウクライナ語正書法の変遷を中心にして ——

ポズドゥニャコーヴァ L. Ye  
寺 田 吉 孝

## 1. はじめに

ウクライナ語で、正書法のことを правопис あるいは орфографія(ギリシア語の *ορθός*「正しい」と *γραφή*「書くこと」と言うが、правопис は орфографія に句読法 (пунктуація) を含めたより広い範囲を対象とする場合が多い。

ウクライナ語の正書法とは、ウクライナ語において一般に受け入れられている文字で言葉を伝える方法を規定する規則の体系である。国家の正書法は、アルファベットから句読点等の記号の使用規則まで、民族文化の重要な構成要素であり、民族文化と切り離すことのできない付属物である。現行のウクライナ語の正書法は、2007 年に発表された。

本稿は、ウクライナ語正書法の通史の試みであるが、現代ウクライナ標準語確立を模索し始めた 19 世紀以降の正書法の変遷を中心に述べていく。

## 2. ウクライナ語正書法の発展の歴史的区分

ウクライナ語正書法の成立段階は 3 つに分けられる。

- ① ウクライナ・ルーシ期 (10 世紀～17 世紀初め)
  - a) 古ウクライナ・ルーシ期 (10 世紀～14 世紀第 3 四半世紀)
  - b) 古ウクライナ期 (14 世紀第 4 四半世紀～17 世紀初め)
- ② 1619 年発行のメレチィ・スモトリツィクィー (Мелетій Смотрицький) の『文法』の規範 (17 世紀初め～18 世紀末)
- ③ 新ウクライナ語期 (19 世紀～今日)
  - a) 現代語の正書法改良の模索 (19 世紀～20 世紀初め)
  - b) 正書法の規範化 (20 世紀初め～現在)

### 3. ウクライナ語正書法史

#### 3-1. ウクライナ・ルーシ期 (10世紀～17世紀初め)

##### 3-1-1. 古ウクライナ・ルーシ期 (10世紀～14世紀第3四半世紀)

ウクライナ語正書法の源は、スラヴの文字の創始者キリールとメフォーディによって9世紀に基礎が置かれた古スラヴ語の正書法に始まる。

ウクライナ語の文字体系は、当時とほとんど変わっていない。現在のアルファベットの中で古スラヴ語のアルファベットになかった文字は、Іとİの2つしかない。文字Іは、16世紀の終わり頃から知られるようになり、17世紀に広まった。文字İは、最初はѦの代わりとして、また、新たな閉音節におけるeの場所にかかれていたが、後に、й+iの音結合の機能を持つようになった。また、キリール文字で書かれたルーシの写本において、eとєの文字の区別はなかった。

##### 3-1-2. 古ウクライナ期 (14世紀第4四半世紀～17世紀初め)

正書法を維持していたのは、主に、ブルガリアからルーシに来て働き、テキスト（主として、教会文書）を翻訳した人達である。14世紀から16世紀の期間、祈祷書の写本（一部分は世俗的な写本）において主流だったのは、タルノヴォ（Търново）<sup>1</sup>の総主教のイエフティミイ（Євтимій）によって改良された正書法だった。この正書法の影響は、14世紀末頃から現れ、17世紀の20年代まで続いた。この期間は、言語学において、「第2次南スラヴの影響（Другий південнослов'янський вплив）」の名で知られている<sup>2</sup>。

#### 3-2. 1619年発行のメレチ・スモトリツィクィーの『文法』の規範 (17世紀～18世紀)

1619年にМ. スモトリツィクィーの著作『スラヴ語文法の正しい構成（Граматіка словенскія правильноє синтаґма）』が発行されたが、その中にあるスラヴ語の文章にウクライナ語の音が部分的に反映されていた。当時、гとґの意義が区別され、джとдзの文字結合が提案され（当時、ウクライナ語には、この音結合に相当する音があった）、さらにйの文字の使用が規範化された。

18世紀初め、ロシアのピョートル大帝の治世に文字改革が行われた。伝統的なキリール文字から簡素化された「世俗文字（гражданка）<sup>3</sup>」に代わった。新しいアルファベットと文字形の改良には、ウクライナの学者たちも参加した。32文字からなる新字体の最初の活字体は、リヴィウ近郊のジョウクヴァ（Жовква）市で印刷された。この32文字は、現在に至るまで大きな変更なく、

<sup>1</sup> 第二次ブルガリア帝国の首都。

<sup>2</sup> 1. Гнатенко Л.А. Староукраїнський правопис останньої чверті XIV — першої чверті XVII ст. у зв'язку з проблемою другого південнослов'янського графіко-орфографічного впливу (букви на позначення голосних звуків). — К., 1997.

<sup>3</sup> 非教会文字とも言われる。

ウクライナ語、ベラルーシ語、ロシア語の正書法の基盤となっている。いくつかの古くなった文字(w, Ө, ђ, Ѱ, v, Ѫ, Ѭ など)は削除され、その代わり、それまで一部のテキストにしか用いられていなかった ю と я の文字が使われるようになった。

### 3-3. 新ウクライナ語期 (19世紀～現在)

#### 3-3-1. 現代語の正書法改良の模索 (19世紀)

1798年に、イヴァン・コトリャレウスキィー (Іван Котляревський) の『エネイーダ (Енеїда)』が発行された。これは、新しいウクライナ文学の始まりであると同時に、ウクライナ語を文字化する方法の模索の契機となった。伝統的な文字体系の変革の必要性が生まれたのである。生きた口語のウクライナ語で書くことを目指す作家たちは、古い書記法に従うのではなく、単語の音をそのまま伝えるための方法を模索しなければならなかった。アルファベットの中には、1818年に文字 и が、1837年に文字 є と文字結合 юо, ьо が、1873年に文字 і がそれぞれ加えられた。その代わりに、文字 ъ, ы, ь は、次第に使われなくなっていった。アルファベットの要素の絶え間ない早い移り変わりとその要素の多様な用いられ方により、ウクライナ語に関わる実験がかなり多く行われ、多数の正書法体系が生まれた。1798年から1905年までの間に、その普及度は異なるが、約50の正書法が生み出された<sup>4</sup>。

それらの試みの中で、特に有名なものは、次のものである。

- a. オレクシィ・パヴロウスキィー (Олексій Павловський) の正書法体系
- b. 『ルサルカ・ドニストロヴァ (Русалка Дністрова)』のヴァリエント (1837年)
- c. クリシウカ (кулішівка) ; 『南ルーシについての記録 (Записки о Южной Русі)』 (1856年) と 『文法 (Граматика)』 (1857年) における Р. クリシ (Куліш) の正書法体系
- d. ドラホマニウカ (драгоманівка) ; 19世紀70年代のキエフで、言語学者 Р. ジテツィクィー (Житецький) をリーダーとするウクライナの文化活動家たちのグループによって作られた。このグループの一員に G. ドラホマノウ (Драгоманов) がいた。
- e. ジェレーヒウカ (желехівка) ; ウクライナの学者 Ye. ジェレーヒウシクィー (Желехівський) がその著書『小ロシア・ドイツ語辞典 (Малорусько-німецький словарь)』 (リヴィウ, 1886年) の編纂時に作成した正書法体系。

ジェレーヒウシクィーによって提案された正書法は、S. スマリ・ストリツィクィ (Смаль-Столицький) と F. ハルトネル (Гартнер) の『ルーシ語の文法 (Руська граматика)』において確立された。『ルーシ語の文法』では、文字 ı と і が用いられた。また、接頭辞末の子音と語根頭にあるヨータ化した母音<sup>5</sup>を分離して発音することを表わすためのアポストロフィも用いられ

<sup>4</sup> 2. Огієнко І. Нариси з історії української мови: система українського правопису//Популярно-науковий курс з історичним освітленням. — Варшава, 1927. С.16–20.

<sup>5</sup> 前に[j]が付加された母音、たとえば, є[je], і[ji], я[ja], ю[ju]など。

た。例えば, роз'єдиняти, роз'їзд<sup>6</sup> のように。しかし, 唇音の後のヨータ化した母音の前では, アポストロフィを書くことは提案されなかった。г, г'; е, є; и, й, і, ї の順にアルファベットに入れられ, 軟音記号はアルファベットの最後に置かれた。

ボリス・フリンチェンコ (Борис Грінченко) は, 修正が加えられたジェレーヒウカを適用して, 全14巻の本格的な『ウクライナ語辞典 (Словарь української мови)』(1907-1909年)を編纂した。

### 3-3-2. 正書法の規範化 (20世紀~現在)

20世紀におけるウクライナ語正書法の整備に非常に大きな役割を果たしたのは, フリンチェンコが『ウクライナ語辞典』で適用した正書法体系である。その辞書の序文で, フリンチェンコは, «прийнятий той правопис, який вжито в українських паралелях в «Словаре русского языка, составленном Вторым Отделением Императорской Академии Наук» і в той же час вживається і в наукових та інших виданнях Наукового товариства імені Шевченка у Львові (『ロシア帝国アカデミー第2部会編纂ロシア語辞典』にあるウクライナ語の対応表現において用いられると同時に, リヴィウにあるシェウチェンコ記念学術協会の発行物において用いられている正書法が採用され)»<sup>7</sup>と述べた。

フリンチェンコの仕事は非公式ながら実質上の正書法となり, 1907年から, 公式のウクライナ語正書法が初めて作成される1918年までの間, ウクライナの作家と出版社にとって模範の書記法となった。フリンチェンコは, йо,ьоのスペリングとアポストロフィを守ろうとした(є, і, я, юの前の唇子音の後にもアポストロフィを用いた)<sup>8</sup>。フリンチェンコは, 先人たちの実践の中から, 合理的であったもの, ウクライナ語の本質に適合していたもの, さらに, 正書法に民族的な性格を加えていたものすべてを利用した。フリンチェンコの役割については, I. オヒエンコ (Огієнко) が «Правопис цього словника був прийнятий по всіх українських редакціях та виданнях. Ось цей правопис, як вислід збірної праці письменників всього ХІХ-го століття й усього українського народу, і запанував в Україні, і держиться в нас аж до сьогодні (この辞書の正書法は, ウクライナ語のすべての刊行物で採用された。この正書法は, 19世紀の作家達とウクライナの全人民の共同作業の結果として, ウクライナに広まり, 今日に至るまで我々のなかに保たれている)»<sup>9</sup>と語っている。フリンチェンコの辞書において採用された正書法規則の大半は, 現在まで残っている。音声にほぼ基づいて, 「聞こえるように書く」というのが, この正書

<sup>6</sup> ジェレーヒウスキィのように, роз'охтити, роз'учить とはしなかった。

<sup>7</sup> Словарь украинского языка, собранный редакцией журнала «Киевская старина»/Редактировал, с добавлением собственных материалов, Б.Д. Гринченко. — К., 1907. — С. XXIII.

<sup>8</sup> Дзендзелівський Й.О. Заходи Петербурзької академії наук щодо впорядкування українського правопису//Мовознавство. — 1971. — № 1. С.70-76.

<sup>9</sup> Огієнко І. (митрополит Іларіон). Історія української літературної мови. — К., 1995. С.238.

法の基本である。

ウクライナの国家機構の再開に伴い、全ての人々にとって必須であり、公式に承認された明確な正書法規則集を作成する必要性が出てきた。中央ラーダ初代教育大臣である I. ステシェンコ (Стещенко) は、1917 年、キエフ大学教授のオヒエンコにウクライナ語正書法の簡潔な規則を作成するように依頼した。オヒエンコは、その後、1918 年に、教育大臣 M. ヴァスィレンコからもこの仕事を依頼された<sup>10</sup>。《Найголовніші правила українського правопису. З доручення Правописної комісії склав прив.-доц. І.Огієнко (ウクライナ語正書法の最重要規則。正書法委員会の依頼により、専任教員 I. オヒエンコが編集)》という著作の写しが保存されている(「1918 年 4 月 29 日、キエフ」の日付と場所が記されている)。ここで注目されるのは、1918 年 4 月に、国民教育省付属正書法委員会によってこの規則が採択されたことである。この委員会のメンバーの中には、座長の I. オヒエンコ以外に、A. ロボダ(Лобода), G. フルンシキイ(Грунський), G. ホロスケヴィチ (Голоскевич), O. クルイロ (Курило) がいた<sup>11</sup>。

1918 年 1 月 17 日、中央ラーダは、『ウクライナ語正書法の主要規則 (Головні правила українського правопису)』を公にしたが、それはウクライナ語の体系全体は捉えてはいなかった。1919 年 5 月 17 日には、ウクライナ科学アカデミーが『ウクライナ語正書法の主要規則』を承認した。これは、後に行われるすべての改良と訂正の基盤にもなった。オヒエンコによって 1918 年に確立されたこの規則の中には、次のことが述べられている。

1. 外来語の g の音は, г によって置きかえられる<sup>12</sup>。гімназія, телеграф, генерал, газета, термінологія, психологія
2. 外来語において, л の音は, 文字上では, 大抵, 軟音ではない。すなわち, л の後では, я, є, ьо, ю ではなく, а, е, о, у が書かれる。класа, план, новела, билет, легальний, легенда, легіон, лекція, логика, флот, філологія, аналогія, лояльний, лозунг, клуб など。

1925 年 7 月 23 日, ウクライナ・ソヴィエト共和国 (УРСР) 人民委員ラーダ (РНК) は, ウクライナ語正書法整備のための国家委員会 (国家正書法委員会) を組織することを決議した。この委員会には УРСР からの 20 名を超える学者に加え, さらに, 西ウクライナからステパン・スマリ-ストリツィキイ (Степан Смаль-Стольцький), ヴォロディミル・フナチュク (Володимир Гнатюк), ヴァシリ・シモヴィチ (Василь Сімович) といった代表者が入った。

ほぼ 1 年の作業の後, 1926 年の 4 月, 『ウクライナ語正書法案 (Проект українського правопису)』が «для ознайомлення широких кіл — як спеціалістів-філологів, так і робітників слова,

<sup>10</sup> Огієнко І. (митрополит Іларіон). Історія української літературної мови. — К., 1995.

<sup>11</sup> Шумлянський Ф. Найголовніші правила українського правопису Української академії наук видання 1921 року (Розвідка)//Записки Херсонського інституту народної освіти ім. Н.К. Крупської. — Ч.П. 1926 р. — Херсон, 1927. С.8-11.

<sup>12</sup> この場合, しばしば г も書かれることがある。例えば, телегграф, ггенерал。

як-от письменників, редакторів тощо, а надто педагогів-практиків (言語学者だけでなく、作家や編集者のような言葉の労働者、そしてとくに教育実践者に周知するために)» ハルキウで発行された<sup>13</sup>。

数カ月間の審議、検討の結果、正書法案は、全ウクライナ正書法会議(1927年5月26日～6月6日)で承認された。РНКの決定に従って、1928年9月6日から発効となった。この正書法は『ハルキウの正書法(харківський правопис)』あるいは『スクリプヌイクの正書法(скрипниківський правопис)』として歴史に残った。これらの名前は、この正書法が作成された都市の名前、あるいは、当時の教育人民委員のムィコラ・スクリプヌイク(Микола Скрипник)の名から来ている。1926年～1927年は、外来語におけるгとгの使用や硬音と軟音のлの使用の問題が、現在と同様に、特に先鋭化した問題となった。すなわち、東ウクライナと西ウクライナの正書法の伝統が最も異なっているのは、この点なのである。

1926年の『ウクライナ語正書法』案は、外来語におけるгとгの使用に関して、1912年～1921年のアカデミー正書法規則に準拠している。すなわち、外国語のhとgは、ウクライナ語のгによって、同じように表わされる。例えば、агрономія, агент, агітація, егоїст, бравнінг, генерал, гегемонія, гігієна, гігроскоп, гангрена, гімназія, географія, фігура, телеграф など。

しかし、外国の地名、人名などの固有名詞においては、г(=h)とг(=g)が区別される。Готфрід, Густав, Гергард, Гегель, Гавтман, Іріг, Брюгге, Гюго, Гете, Геттінген, Арагонія, Івінея, Чікаго, Копенгаген, Іранада, Тегран(テヘランではなく)など。

借用されてから時間を経ている地名に関しては、外国語のgも文字гによって表わされている。例えば、Галилея, Голгота, Рига, Єгипет, Англія, Киргизія, Греція など。

外来語における「лとль」, 「гとг」の正書法は、ガリツィアとドニエストル川上流域の正書法の伝統を特徴づける。これらの伝統の全ウクライナ正書法会議での競い合いに関して、O. スィニャウシクィー(Синявський)は«Настала уперта й затяжна боротьба, і слід сказати, що це було не стільки змагання двох правописно-мовних звичок, як двох культурно-історичних впливів. Щоправда аргументація обох течій була досить різноманітна й ґрунтовна, але кінець-кінцем найістотніші мотиви відстоювати свої позиції в обох напрямів полягали в визнанні різних культурних впливів (根強く長期にわたる闘いがやってきた。二つの正書法的・言語的習慣の競い合いと言うよりも、2つの文化的・歴史的影響の競い合いであったと言うべきである。両者の論証はかなり多様だが妥当なものである。しかし、結局のところ、両者が自分の立場を擁護しようとする最も重要な動機は、多様な文化の影響が認められるか否かにあった。)»と記している<sup>14</sup>。50人を超える出席者の内、22人がла, ло, луを、20人がля, льо, люを主張

<sup>13</sup> Український правопис (Проект). — Харків, 1926. С.5.

<sup>14</sup> Синявський О. Коротка історія «Українського правопису»//Культура українського слова. — 1931. — 36. 1. С.104.

した。また、外来語の g をウクライナ語の r によって表すことに賛成したのが 26 人で、r によってあらわすことに賛成したのが 10 人だった。

正書法会議の場で、会議での議決における矛盾点の調整のために創設された委員会は、懸案の問題に関して、次のように答申した。「Щодо передачі чужого l, доручити редакційній колегії деталізувати це правило на основі «Проекту» в напрямі ухвали Конференції. Щодо передачі чужого h — g то визнати за потрібне повернутися до «Проекту» (外来語の l を表すことに関しては、会議の決議の方針に沿って、『正書法案(Проект)<sup>15</sup>』に基づき、この規則を詳細に検討するように編集委員会に依頼する。外来語の h — g を表すことに関しては、『正書法案 (Проект)』に戻る必要があると認める」<sup>16</sup>

1928 年の『ウクライナ語正書法』は理想的なものではなかったが、ウクライナ民族の精神生活における重大な出来事だった。これは、ウクライナ民族のための統一正書法を作成する最初の試みであった。ウクライナ人居住地域全域にわたって、マスメディア (1927 年には、新聞『ヴィスチ (Вісти)』の特別付録として、『ウクライナ語正書法；議論用通報 (Український правопис: Дискусійний бюлетень)』が世に出た) においても、学問的な雑誌 (特に雑誌『ウクライナ (Україна)』) においても、この正書法規則に関する議論が沸き起こった。そして、この正書法は、ウクライナのさまざまな地域の代表者達が参加した全ウクライナ正書法会議において、民主的な方法 (多数決) で採択された。1928 年の『ウクライナ語正書法』は、正書法や句読法の規則を提供するだけではなかった。それは、ウクライナ標準語の文語の音声学的、形態論的な構造を法典化した。そして、このことにこそ、大きな意義が存在しているのである。

1933 年、A. フヴィリャ (Хвиля) を座長とする正書法委員会は、『ハルキウの正書法』を民族主義的だとしてクレームを付け、即座にあらゆる辞書の発行を止め、そして、何の議論もなく、非常に短期間 (5 か月間) で、新たな正書法を作成した。この正書法は、かつてないほど、ウクライナ語とロシア語を統一化するものだった。アルファベットの中から文字 r が取り除かれ、ウクライナ語の学術用語は再検討され、ロシア・ウクライナ語辞典に従わされた。ウクライナ学術語研究所 (Інститут української наукової мови) は 1930 年に廃止された。この版の正書法は、1933 年 9 月 5 日付で、ウクライナ・ソヴィエト共和国教育人民委員会の決議により採択された。

新しい正書法規則では、l の文字を持つ外国語起源の単語は、次のように綴られる。

1. 軟音化していない л (たとえば л, ла, ло, лу) : формула, клас, соціологія, Ла-Манш
2. 軟音化した л (たとえば ль, ля, лью, лю) : автомобіль, регулятор, пляж,  
従って, le という結合は, ле を用いて綴られる : пленум, лекція, телеграф

<sup>15</sup> 1926 年ハルキウで発行された正書法案を指す。

<sup>16</sup> Синявський О. Коротка історія «Українського правопису»//Культура українського слова. — 1931. — 36. 1. С.105.



英語の単語では、すでに軟音の *л* で借用されている単語 (біль, бульдог, Вільсон など) を除き、語尾や子音の前で、*л* と綴られる: Мелвелл, голкіпер

3. 外国語の *h* と *g* は、発音に関係なく同様に、*г* を用いて綴られる。

а) гіпотеза, гандбол, Гюго

б) генерація, графік, міграція, Гете

1928年版の『ウクライナ語正書法』に対して、1933年に加えられた変更は、知識人達を動揺させた。そのため、ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミー言語学研究所は、正書法に関する研究を続けた。

1938年5月14日、科学アカデミー言語学研究所によって練り上げられた正書法変更案を検討するために、国家正書法委員会の設立が承認された。その委員会の書記長に任命されたのは M. フルンシクィー (Грунський) だった。この案は、1938年の秋、審議のために 350 部印刷された。この案に関しては、次の点に注目すべきである。

1. この案では、アルファベットに文字 *г* がない
2. すべての第3変化名詞<sup>17</sup>の単数生格は、語尾 *-i* を持っている (вісті)
3. 接尾辞 *-ен-* を持っている第4変化名詞<sup>18</sup>の単数生格は、語尾 *-i* を持っている (імені)
4. 外国語起源の単語では、すべての母音の後で、*i* を書くことが推奨された (героїчний, прозаїк)

この作業を行っている間に、ポーランド領内のウクライナ人居住地域のハルィチナー、西ヴォルィーニ、さらに、ルーマニア領内のウクライナ人居住地である北ブコヴィーナなどのウクライナ共和国への統合が起こった。これらの地域では、この時まで1928年の規範が有効であった。そのため、再びウクライナ語の正書法に関して問題が生じた。

1940年に M. フルンシクィーが長となった国家正書法委員会は、その後も、正書法の諸問題に関して作業を進めており、1940年11月の時点で、第2の正書法案がすでに出来上がっていた<sup>19</sup>。その案では、多くの規則が修正されていた。特に注目すべきなのは、借用語において、母音の後に *i* ではなく *і* を書くという規則が提案されたことである。例えば, архаїчний, прозаїк, Каїр など<sup>20</sup>。

また、注目を引くのは、「呼びかけの語形 (клична форма)」である。案では, товарищу Петро と товарищу Петре, брате Іван と брате Іване, Іван Петрович と Іване Петрович などの呼びかけ表現の並行的な使用が提案された<sup>21</sup>。

<sup>17</sup> 主に、軟子音で終わる女性名詞が第3変化名詞に属する。

<sup>18</sup> 主に、*-я* で終わる中性名詞が第4変化名詞に属する。

<sup>19</sup> Москаленко А.А. Історія українського правопису (радянський період). — Одеса, 1968. С.44.

<sup>20</sup> Пеліпас І. Про деякі питання українського правопису//Комуністична освіта. — 1940. — № 11. С. 42.

<sup>21</sup> Там же. — С.40.

この案は、1940 年末に、審議用に 50 部発刊された。戦争勃発のため、ウクライナ語正書法規則の最終的な練り上げの段階で滞ったが、作業はその後も継続した。

1946 年版の正書法に対して、1959 年に、さらにいくつかの小幅の変更が加えられた。そして、翌年の 1960 年に発行された。この版は、1956 年にロシアで発行された『ロシア語正書法・句読法規則 (Правила русской орфографии и пунктуации)』の影響が大きい。1960 年から 1990 年まで、この 1960 年版が公式の正書法だった。

上記の事情をもう少し詳しく見て行く。50 年代末に、正書法統一委員会が創設された。この委員会は、ウクライナ科学アカデミー O.O. ポテブニャ (Потебня) 記念言語学研究所、国立キエフ大学、国立キエフ教育大学などからの代表者達で構成されている。1959 年 11 月、『ウクライナ語正書法』の改訂版の印刷許可が出て、1960 年に冊子が発行された。その序文において、この冊子の中には、「усунені розбіжності в спільних моментах українського й російського правописів; деякі особливості пунктуації, вживання великих і малих букв, написання слів разом і окремо, правила переносу та ін. (ウクライナ語とロシア語の差異が除かれている。例えば、幾つかの句読法の特徴、大文字・小文字の使用、分かち書きをするか否か、改行規則など)」と述べられている。それ故、ウクライナ語の正書法は、1956 年に発行された『ロシア語の正書法と句読法の規則 (Правила русской орфографии и пунктуации)』に接近することとなった<sup>22</sup>。そして、この版は、ほぼ 30 年間効力を維持した。

「ペレストロイカ<sup>23</sup>」の開始後、ウクライナ語正書法の改良は再び焦眉の問題となった。正書法規則の改訂作業を始めたのは、ウクライナ科学アカデミー附属正書法委員会だった。そこで検討された案については、再建されたシェウチェンコ記念ウクライナ語協会<sup>24</sup> (Товариство української мови ім. Т. Шевченка) においても議論された。新しい案は 1989 年 11 月 14 日に承認され、1990 年に発行された<sup>25</sup>。主たる成果は、文字 r と呼格 (кличний відминок) の復活だった<sup>26</sup>。他にもいくつかの変更がなされたが、実際には、それらの全てが慣行となったわけではなかった。なぜならば、言論界において、活発な議論を呼び起こしたからである。その後、誤植が訂正され、図の資料が一新くなった。

第 1 回国際ウクライナ学会 (1991 年 8 月 27 日～9 月 3 日) において、ウクライナに居住するウクライナ人だけでなくディアスポラとして海外に暮らすウクライナ人のためにも、統一された新正書法の構築が必要であるという決議がなされた。このことは、ウクライナ語のすべての歴史的経験に目を向けなければならないということを意味している。

<sup>22</sup> Москаленко А.А. Історія українського правопису (радянський період). — Одеса, 1968. С.47.

<sup>23</sup> ウクライナ語では、「ペレブドローヴァ (перебудовова)」である。

<sup>24</sup> その議長はドミトロ・パウルィチコ (Дмитро Павличко) だった。

<sup>25</sup> Український правопис. — 3-є вид., виправлене й доповнене — К., 1990.

<sup>26</sup> ソ連時代には、呼格は格とは認められず、「呼びかけの語形(ロシア語で звательная форма, ウクライナ語で клична форма)」と呼ばれていた。

すべての歴史的経験に基づいた規範を構築しようという考えを支持していたのは、科学アカデミー正書法委員会だった<sup>27</sup>。1994年6月8日、ウクライナ政府は、内閣付属のウクライナ国家正書法問題委員会のメンバーを承認した。委員会の議長となったのは、当時の副首相であり、アカデミー会員であったГ.ジュリンシクィー（Жулинський）だった。この委員会には、著名な言語学者、作家、教育者達が加わっていた。委員会は1996年末までに『ウクライナ語正書法』の新版を作成しなければならなかった。正書法の諸規則の改訂作業を実行する責任を負ったのは、再建されたウクライナ国立科学アカデミー・ウクライナ語研究所<sup>28</sup>だった。内閣付属の国家正書法委員会は、1996年の12月には正書法と句読法の諸規則の新版に関する審議を終了した。多くの規則が正確で簡素になった。また、規則の例外がかなり減らされた。しかしながら、委員会の場では、多くの提案、特に、1928年の規範の考慮あるいはそれへの回帰に向けられた提案は、大多数のメンバーが賛成することもあったが、破棄されることが多かった。こういう事態になったのは、提案に対して3分の2以上の賛成者がいなければ、正書法は1990年のままとするという取り決めがあったからである。

前述の研究所の幹部は、作成された資料を整理し、冊子の形にして発行する義務があったが、『ウクライナ語正書法』の作業を完了できなかった。

当初の目標は、2年半で（1996年末までに）正書法の新版を準備することだったが、諸規則の改訂作業はかなり遅れた。最終的に、作成された提案のすべては、1999年1月中頃にウクライナ語研究所に伝えられた。この案は、『1999年の正書法案（Проект правопису 1999 року）』、あるいは、単に『案（Проект）』<sup>29</sup>という名前で知られている。

言語は変化せず立ち止まってははいない。新しい単語が生まれ、借用のプロセスが続き、科学技術の専門用語が増えていっている。また、翻訳等の実践の場が正書法の必要性を引き出している。現行の『ウクライナ語正書法』に関する問題は、起こるべきして起こった。このため、ウクライナ科学アカデミー幹部会は、ウクライナ科学アカデミー会員V.G.ルサニウシクィ（Русанівський）を中心とする正書法代表委員会を立ち上げた。

正書法委員会の仕事はいくつかの段階から成り立っている。第1段階（準備段階）として、言語学研究所では、A.A.ブリャチコ（Бурячко）、S.I.ホロヴァシチュク（Головащук）、G.G.コレスヌィク（Колесник）からなる作業グループが創設された。このグループに任されたのは、『ウクライナ語正書法』の新版に取り入れるべき修正と補足の案を練り上げることであった。作業グループは、次にあげる共通の方針に従わなければならなかった。

- 1) 伝統的なウクライナ語の書記体系を変更しない。しかし、アルファベットにおける文字の

<sup>27</sup> Український правопис. — 4-те вид., виправлене і доповнене — К., 1993.

<sup>28</sup> これは、実際上は、1921年に創立され1930年に廃止されたウクライナ語研究所が一新されたものである。

<sup>29</sup> 1933年までのように、母音のヨータ化を復活させることが提案されているので。проект は、проект と綴られている。

配置順序は変更できる。

- 2) 新しい規則や例外によって、ウクライナ語の単語の綴り方の原則を複雑にしない。  
逆に、同タイプの現象を一つにまとめるために、規則や例外の数を減らすように努める。
- 3) 出来る限り、複合語の正書法を簡略化する。
- 4) 外国語起源の単語の綴り方の規則、特に、地名、人名の綴り方の規則を精査する。

作業グループによって練り上げられた今回の『ウクライナ語正書法』の原案は、さらに、学者グループによって検討された。学者グループは、さらに幾つかの修正と補足を組み入れることを提案した。すべての意見を集約後、この正書法案は140部印刷された。そして、この案は、さらに細かい検討を加えるために、国民教育省、高等教育省、ウクライナ文化省、ウクライナ語の新聞雑誌の発行所などへ送られた。『ウクライナ語正書法』の原案は、大学のウクライナ語講座やタラス・シェウチェンコ (Тарас Шевченко) 記念ウクライナ語協会「プロスヴィータ (Провіта)」での学術会議でも議論された。正書法委員会は、新たに修正が加えられた『ウクライナ語正書法』案を詳細に検討した後、これを公刊することを決定した<sup>30</sup>。

現代のウクライナ語作家の中には、現行の綴り方規則、例えば、借用された新語や外国語の固有名詞の綴り方の規則などから幾分逸脱している者がいる。これは、現行の正書法がウクライナ語の書記方法によって再現されるすべての可能性や細かなことを考慮しているわけではなかったからである。つまり、出版社の中には、多くの地理、歴史、文学の書物において、正書法を顧みることなく、ラテン文字使用言語からの現代風の転写方法を採用しているところがある。これらの刊行物に特徴的なのは、英語の H と G (それに対応するのは Г と Г') を伝える際に、はっきりと差異を示しているところである。一方、現行の正書法は、いつ Г を書いて、いつ Г' を書くかを規定せず、両方の場合、同じ文字 Г を利用するとなっている。

最新版のウクライナ語の正書法がどのようなものであるべきかという今日の議論においては、様々な意見が述べられている。協会の一部には、現在の『ウクライナ語正書法』には、何も変更を加える必要がないと考え、1928年の規範に対立的な傾向を持っている人がいる。例えば、P.P. トロチコ (Толочко) は、«не треба бути мовознавцем, щоб зрозуміти, що немає жодної можливості створити систему норм, які охопили б одночасно нормативну сферу української «материкової» літературної мови і діалектів української діаспори. Ми весь час розуміємо під останньою переважно американських чи канадських українців, але ж є ще й ті, які проживають у країнах Західної Європи, Австралії, а також в Аргентині, Росії, Білорусії, Казахстані. Сповідуючи принцип поєднання, мусили б врахувати у новому правописі також мови цих діаспо (ウクライナ『本土』の標準語とウクライナ人ディアスポラの諸方言の規範領域

<sup>30</sup> Український правопис/Ін-т мовознавства ім. О.О. Потебні НАН України, Ін-т української мови НАН України. — Київ, 2007.

を同時に捉える規範体系を創り出す可能性がないということを理解するためには、言語学者である必要はない。我々は、ディアスポラと言えば、主としてアメリカとかカナダのウクライナ人を絶えず思い浮かべるが、西ヨーロッパ諸国、オーストラリア、アルゼンチン、ロシア、ベラルーシ、カザフスタン等で生活しているウクライナ人もいる。統合の原則に従いながら、新しい正書法の中には、これらのディアスポラの言語も考慮しなければならないであろう。)»<sup>31</sup>と考えている。さらに、П.П. Толочко は、«що найкращим результатом роботи Національної правописної комісії було б утвердження в правах нині діючого українського правопису. Жодного реформування українська літературна мова не потребує... Адже до всіх бід — економічних, соціальних, екологічних, які переживає сьогодні Україна, ми... намагаємося додати біду з реформуванням мови(国家正書法委員会の最良の成果となるのは、現行のウクライナ正書法規則の良さを確信することであろう。ウクライナ標準語には、いかなる改革も必要ではない。(中略)なぜならば、ウクライナが今被っているあらゆる災い、すなわち、経済的、社会的、生態的災いに加えて、言語の改革という新たな災いを加えようとしているからである。)»<sup>32</sup>とも考えている。

1928年の正書法に完全に戻る必要はないという意見を表明している人もウクライナ協会にはいる。作家であり文学博士候補の V. パハレンコ (Пахаренко) はこれにそった意見を述べた<sup>33</sup>。

ウクライナ協会の半数は、1928年の正書法規則へ完全に返ることが必要であるという意見を述べている。その意見を述べた一人が、作家であり、文献学博士候補 V. パハレンコである。

1927-1928年に採択された規則の大多数は、『ウクライナ語正書法』のその後の版に反映されている。それらは現在まで議論の対象になったことはない。特に成功し定着しているのは、ウクライナ語の単語および借用語のスプリングに関わる部分と、標準語の文法体系を法典化している部分である。

アカデミー会員の Yu. シェヴェリョウ (Шевельов) は、«не мета правопису воювати з мовою і накидати їй те, що їй уже чуже а формулювати, як писати те, що є в мові, а не реформувати мову засобами правопису (言語と戦ったり、もう必要でなくなったものを言語に書き加えたりすることが正書法の目的ではない。正書法によって言語を改革することが目的ではなく、言語の中にあるものをどのように書くべきかを簡潔に表現するのが目的である。)»<sup>34</sup>と考えている。

ウクライナ語の正書法の進展により分かったことは、正書法の問題は、先ず第一に、ウクライナ語 (標準語と多種多様な方言) の現在の構造にも、その歴史 (その中には、正書法成立のプロ

<sup>31</sup> Толочко П.П. Що або хто загрожує українській мові. — К., 1998. С.14.

<sup>32</sup> Там же. — С.15

<sup>33</sup> Пахаренко В. «Ну що б, здавалося, слова...»: Правописні змагання як дзеркало самовизначень сьогочасних українців//Літературна Україна. — 1998. — 24 грудня. С.10

<sup>34</sup> 16. Літературна Україна. — 1999. — № 13/14. — 1 квітня. С. 10.

セスも加えられる)にも通じている言語学者が検討しなければならないということである。現在、ウクライナ語研究所では、作業グループの活動が活発である。その作業グループには、ウクライナ科学アカデミー・ウクライナ語研究所やウクライナ科学アカデミー・O.O. ポテブニャ記念言語学研究所の研究者だけでなくキエフの高等教育機関の教員も加わっている。

ウクライナ科学アカデミー准会員・文学博士 V.V. ニムチュク (Німчук), ウクライナ科学アカデミー准会員・文学博士 I.R. ヴィホヴァネツィ (Вихованець), 文学博士 K.G. ゴロデンシカ (Городенська) などのウクライナ語研究所の研究者達, ウクライナ科学アカデミー准会員・文学博士 G.P. ピウトラク (Півторак), 文学博士 V.V. ジャイヴォロノク (Жайворонок), 文学博士 N. F. クリイメンコ (Клименко) などのポテブニャ記念言語学研究所の研究者達, ウクライナ教育アカデミー准会員・文学博士 A.P. フルィシチェンコ (Грищенко), 文学博士 O.D. ボノマリウ (Пономарів), 文学博士 トツィカ (Тоцька) などのキエフの高等教育機関の教師達が加わったグループは、ウクライナ内閣付属正書法国家委員会の会議資料を綿密に検討した。このグループは、ウクライナ語の正書法において議論の余地のある諸問題に再び戻って検討し、『ウクライナ語正書法』の最新版の原案を提出した。その案は、言語学者、文学者、作家、教育学者、編集者だけでなく、ウクライナ語に関心を寄せ、ウクライナ語の現状に心を痛め、その将来を不安に思っている広範囲の全ての人達たちによって議論された。

言語は生きている。言語の体系は常に変動している。そのため、いかなる正書法規則も言語が有する全てを包括することはできない。言語の規範に特徴的なのは二重性質である。つまり、言語の規範は、一面では、言語現象であり、別の面からみると、社会現象としても表情豊かに登場する。言語の規範は徐々に形成される。言語規範の変化は、政治・社会的要因、歴史・文化的要因などによって引き起こされる。例えば、*на Україні*「ウクライナにおいて」という表現では、前置詞 *на* によって、ウクライナが国家ではなく、ある国家の一部であるということを物語っている。1991 年以降、ウクライナは独立国家になっているので、当然、*в Україні*「ウクライナ国において」という表現を使用すべきなのである<sup>35</sup>。ウクライナ語における新しいものを絶えず考慮し、正書法の諸要素を正確にしたり、変更したりする必要がある。そのために、ウクライナ科学アカデミーの組織のなかに、ウクライナ語研究所を基盤にした正書法常設委員会が創設された。

現代ウクライ語正書法は音韻論の原則に基づいている。そして、形態論的、伝統的・歴史的、弁別的原则によって補われている。

音声学的な原則に従えば、単語は、現代標準語に特徴的な正音法の規範に従って、発音されるとおりに書くべきである。

形態論的原則の本質は、語中における形態素の位置や同根語における同化・異化の過程の影響に関わりなく、形態素を統一したスペリングで書くことである。

<sup>35</sup> Зубков М.Г. Сучасний український правопис: Комплексний довідник. — Харків, 2007.

伝統的、すなわち、歴史的原則は確立された書記法の伝統を必要とする。

異化の原則に従えば、同音の単語は、その意味に従って、区別して書かれる。例えば、*У тім, я взгодең и Жив у тім домі* など。

現行の正書法の構造は、下記のようにになっている<sup>36</sup>。

I. 語幹の正書法 (Правопис основи слова)

- 文字による音声の表記 (Літерні позначення звуків) (§ 1-20)
- 接頭辞の正書法 (Правопис префіксів) (§ 21)
- 接尾辞の正書法 (Правопис суфіксів) (§ 22-24)
- 複合語の正書法 (Правопис складних слів) (§ 25-33)
- 大文字の用法 (Вживання великої літери (букви)) (§ 34-40)
- 分綴改行規則 (Правила переносу) (§ 41-42)
- アクセント記号 (Знак наголосу) (§ 43)

II. 名詞, 形容詞, 代名詞, 数詞の変化語尾の正書法 (Правопис закінчень відмінюваних слів)

- 名詞 (Іменник) (§ 44-66)
- 形容詞 (Прикметник) (§ 67-69)
- 数詞 (Числівник) (§ 70-72)
- 代名詞 (Займенник) (§ 73-79)
- 動詞 (Дієслово) (§ 80-85)

III. 外来語の正書法 (Правопис слів іншомовного походження)

- 子音 (Приголосні) (§ 86-89)
- 音 j と母音の伝達 (Передача звука j та голосних) (§ 90-91)
- 子音と母音の結合のグループ (Групи приголосних з голосними) (§ 92-99)
- 外来語の語形変化 (Відмінювання слів іншомовного походження) (§ 100)

IV. 固有名詞の正書法 (Правопис власних назв (прізвищ))

- ウクライナの姓, 姓・名の語形変化 (Українські прізвища, відмінювання імен і прізвищ) (§ 101-105)
- 複雑な i 複雑な особові імена та прізвища й похідні від них прикметники (§ 106-107)
- 地理的 назви (§ 108-114)

V. 句読法の主要規則 (Найголовніші правила пунктуації) (§ 115-125)

---

<sup>36</sup> Український правопис/Ін-т мовознавства ім. О.О. Потебні НАН України; Ін-т української мови НАН України. — Київ, 2007.

## Література

1. Гнатенко Л.А. Староукраїнський правопис останньої чверті XIV — першої чверті XVII ст. у зв'язку з проблемою другого південнослов'янського графіко—орфографічного впливу (букви на позначення голосних звуків). — К., 1997.
2. Огієнко І. Нариси з історії української мови: система українського правопису//Популярно-науковий курс з історичним освітленням. — Варшава, 1927.
3. Словарь украинского языка, собранный редакцией журнала «Киевская старина»/Редактировал, с добавлением собственных материалов, Б.Д. Гринченко. — К., 1907. — С. XXIII.
4. Дзендзелівський Й.О. Заходи Петербурзької академії наук щодо впорядкування українського правопису//Мовознавство. — 1971. — № 1.
5. Огієнко І. (митрополит Іларіон). Історія української літературної мови. — К., 1995.
6. Шумлянський Ф. Найголовніші правила українського правопису Української академії наук видання 1921 року (Розвідка)//Записки Херсонського інституту народної освіти ім. Н.К. Крупської. — Ч.П. 1926 р. — Херсон, 1927.
7. Український правопис (Проект). — Харків, 1926.
8. Синявський О. Коротка історія «Українського правопису»//Культура українського слова. — 1931. — Зб. 1.
9. Москаленко А.А. Історія українського правопису (радянський період). — Одеса, 1968.
10. Пеліпас І. Про деякі питання українського правопису//Комуністична освіта. — 1940. — № 11.
11. Москаленко А.А. Історія українського правопису (радянський період). — Одеса, 1968.
12. Український правопис. — 3-є вид., виправлене й доповнене — К., 1990.
13. Український правопис. — 4-те вид., виправлене і доповнене — К., 1993.
14. Толочко П.П. Що або хто загрожує українській мові. — К., 1998.
15. Пахаренко В. «Ну що б, здавалося, слова...»: Правописні змагання як дзеркало самовизначень сьогочасних українців//Літературна Україна. — 1998. — 24 грудня.
16. Літературна Україна. — 1999. — № 13/14. — 1 квітня.
17. Зубков М.Г. Сучасний український правопис: Комплексний довідник. — Харків, 2007.
18. Український правопис/Ін-т мовознавства ім. О.О. Потебні НАН України; Ін-т української мови НАН України. — Київ, 2007.
19. 小林潔『ロシア文字の話』東洋書店, 2004 年
20. 山口巖『ロシア中世文法史』名古屋大学出版会. 1991 年